

『帝国主義』論に学ぶ

第6回

東京ブロック

「商品輸出」から「資本輸出」に変化

司会：今月号は、第4章「資本の輸出」、第5章「資本家団体の間での世界の分割」、第6章「列強のあいだで世界の分割」に入ります。東京南部県協副会長の秦康博さんに、ポイントを押えたレポートをしてもらいました。それでは、秦さんお願いします。

秦：3章末でレーニンは、当時の世界の金融資本の実情に触れて、「四つの最も裕福な資本主義国」としてイギリス、フランス、アメリカ合衆国、ドイツを上げ、これら四カ国が、「すなわち全世界の金融資本のほとんど80%を所有している」（A・ネイマルクが

『国際統計研究所所報』に掲載した資料『1910年における有価証券総額〈単位10億フラン〉』100頁図表と述べています。なんと、1910年に発行された世界の有価証券総額は600億フランです。そのうちの4790億フランを四カ国で所有しているのです。

この事実からレーニンは、四カ国以外の国々（ロシア、日本など）は、「債務者と貢納者（貢納者）の役割を演じている」（101頁）と指摘します。そして、国際的な金融資本の網を創り出すうえで「資本輸出が演じる役割」（101頁末）を詳しく論じなければならぬ

と述べています。第4章「資本輸出」は短い章ですがたいへん重要です。ところで、「資本輸出」とは何か？

という疑問がわきますよね。「資本輸出」には、「①外国における企業の創設、鉄道建設、鉱山開発などを通じて利潤を獲得することを目的とする産業資本の輸出と、②外国政府債券の買入れ、借付供与、銀行貸付など利子獲得を目的とする貸付資本の輸出である。」という方法があることを押えておきましょう。

過剰資本の行方は国外へ

第4章「資本の輸出」の冒頭は「自由競争が完全に支配していたふり資本主義にとっては、商品の輸出が典型的でした、独占が支配している最新の

◆みんなの学習講座

資本主義にとつては、資本の輸出が典型的となつた」（102頁）と始まります。なぜそうなつたのかについてレーニンは、当時の具体的な事象や資料（「国外に投下された資本」105頁の図表、「国外投下資本の大陸別分布（概数106頁の図表）」等）に基づいて説明しています。

彼は、資本主義の発達したすべての国の資本家たちの独占団体の形成、そして資本の蓄積が巨大な規模に達した少数の最も富んだ国々の独占的地位が形成された先進国では膨大な「資本の過剰」が生じ、膨大な「資本の過剰」は、その国の大衆の生活水準を引き上げることには用いられないで、国外へ、後進国へ資本を輸出することに よつて利潤を引き上げることに用いられている事を立証しています。貧困に喘ぐ自国民には目もくれず、儲けのために資本輸出する、なんとも無慈悲なことであろうか。これらの後進国では、

資本は少なく、地価は比較的に高くなく、労賃は低く、原料は安価であり、その結果高い利潤が得られます。

資本の輸出が巨大な発展をとげたのは、20世紀初頭です（105頁の図表）。巨額の資本輸出は広大な植民地を必要とします。イギリスは、フランスやドイツの2倍（106頁図表）の「資本輸出」を植民地向けに行っていました。資本の輸出は、その資本が向けられる国で、資本主義の発展に影響を及ぼし、その発展を異常に促進します。これが金融資本と独占の時代の特徴です。

内政干渉を伴つ「借款」

遅れた多数の国家は自国の発展を望み、公然とあるいはひそかにその資本を借款として得ようと大貨幣市場にあられ、隣国が自国を出し抜いて借款に応じ、資本輸出国の不当な要求も拒絶せず、不当な利益を提議させられて

います。このことについて、108頁に「借款の条件として、借款額の一部を、債権国の生産物、とくに軍需物、船舶等の購入のことが定められる、ということだす。」と、「特定の利益」についてレーニンが述べています。借款の主な目的は利子取得にもかかわらず、内政干渉をとめないながら「資本輸出」が行われているということだす。

「世界経済」という概念はこの時代から使われますが、地球上の全ての地域が経済的に結びついたことをいいます。その支柱的役割を「資本輸出」が果たしたのです。

独占の時代をつくりだした金融資本は、自分の網（植民地銀行やその支店を通じて）を世界の全ての国々にはりめぐらし、巨大な「資本輸出」によつて、巨大な利潤を、とりわけ後進国から吸い上げました。

そして世界は、帝国主義国の3つのタイプ（イギリスの植民地的帝国主義

フランスの高利貸的帝国主義、そしてドイツの保護関税型帝国主義により間接的あるいは直接的に分割されることになりませう。

資本家団体による世界の

分割と再分割

第5章は、資本家団体のあいだでの世界の分割について説明しています。

レーニンは電気工業の実例に則して、各国の金融資本・資本家たちの独占団体（カルテル、トラスト、シンジケート）による当該国の生産の独占と市場を分割すると述べ、そこから世界市場へとつながり、国際的なカルテルへと進んでいきます。その中からどのように「超独占」へと進むかを究明していきます。

19世紀末から20世紀初頭にアメリカとドイツでは電気工業が最も発達しました。そして1900年の恐慌では比較的小さな企業の没落と大企業のそ

の併呑を極度に促進しました。1900年には7つないし8つのグループがありました。1912年には2つあるいは1つとなつていきます。アメリカとドイツのトラストのあいだに、世界の分割に関する協定（直接分割）が結ばれています。

巨大な資本を自由にする事実上単一の世界的トラストに対して競争すること、いかに困難かは自明です。

このような世界分割は石油業でも行われています。ヤイデルスは1905年こう書いています。「世界の石油市場はこんにちでもなお、2大金融グループのあいだに、すなわちアメリカのロックフェラーの『石油トラスト』とロシアのバクー石油の支配者であるロスチャイルドおよびノーベルとのあいだに分割されている。」（117頁）。

国際軌条カルテルも成立し、協定国の国内市場では互いに競争しないこと。外国市場はイギリス66%、ドイツ

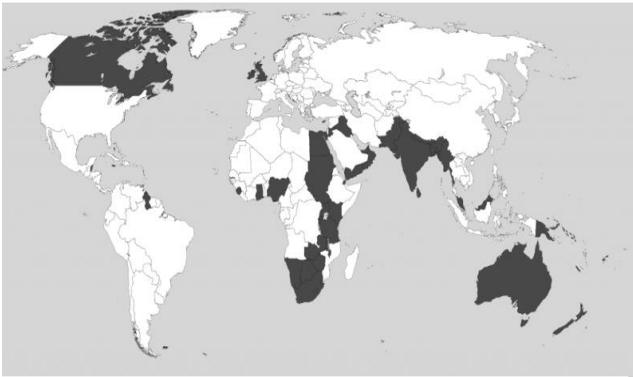
27%、ベルギー7%の比率で分割することが協定されました。

資本家たちが世界を分割するのは、彼らの特殊な悪意からではなくて、集積の到達した段階が、利益を獲得するために、彼らをややおうなしにこの道をとらせる」（124頁）からです。

その際彼らは世界を「資本に応じて」「力に応じて」分割したのです。しかし、この「力」も変化はします。「力関係が——発展の不均等性や戦争や破産などの結果——変化するはあいには・・・再分割を妨げるものではない。」（116頁）と意味深な表現がされていますので、石油業の世界の分割のための闘争について記述されている117頁から120頁を再読されることをお勧めしたい。

そして、レーニンは「資本家団体のあいだの闘争が何のために行われているか」（124頁）と問い、その闘争は「この事情だけが生じつつあるもの

◆みんなの学習講座



イギリスの当時の植民地<塗りつぶし部分>

(第一次世界大戦1914～1918年)の歴史的・経済的意味をわれわれに明らかにする」(124頁)と述べて、帝国主義戦争が各国の金融資本の世界分割のための必然的帰結である、と暗示しています。

レーニンの暗示とは

第6章「列強のあいだでの世界の分割」で、レーニンは、地理学者スーバン等の著作や資料によって、19世紀末で資本主義諸国の植民政策が地球上の未占拠地の占取を終わり(中国と日本はどこにも属していなかった)、世界ははじめて分割を完了(「列強の植民地領有」132頁から133頁の図表参照)したと述べ、植民地領有は、1876年から驚くほど拡大し、1914年には6大強国(イギリス、ロシア、フランス、ドイツ、アメリカ、日本)は、400万平方kmから650万平方kmへと一倍半以上に拡大していると指摘します。そして「今後きたるべきものは、再分割(127頁)である」と、レーニンは「列強の間での世界分割」の現状とその行方を論証しています。

最新の資本主義の基本的特殊性は最大企業の独占的諸団体の支配というこ

とです。「このような独占は、いっさいの原料資源が一手ににぎられるばあいにもつとも強固」(136頁)なのです。だから、資本主義の発展が高度となればなるほど、原料の欠乏がより強く感じられれば感じられるほど、また全世界における競争と原料資源にたいする追求が先鋭化すればするほど、植民地獲得の闘争はますます死に物狂いになるといふことです。死に物狂いで植民地の獲得競争をしているトラストに対して、「保有する資本を少し自国の大衆の状態の改善のために使用せよ」というカウツキー主義者(ブルジョア改良主義者)たちの考えに対して、レーニンは改良主義者の幻想だと批判をしています(137頁)。

金融資本の基礎の上に成長する経済的・政治的構造、すなわち金融資本の政治やイデオロギーは、植民地政策の熱意を強めますから、ヒルファードングの「金融資本の欲するものは、自由

ではなくて支配である」(139頁と指摘は的を射ています。

レーニンは「世界分割の問題を終わるにあたって」と断わり、歴史家トゥリオの著『十九世紀末における政治的および社会的諸問題』のなかの『列強と世界分割』の章の一文を紹介して、「最近の数年間に、中国をのぞく世界すべての自由な土地は、ヨーロッパと北アメリカの諸強国によって占領された。このことを土台として、すでにいくつかの衝突や勢力の移動が行われたが、これら近い将来におけるはるかにおそろしい爆発の前兆である」(142頁)と暗示。そして、「ヨーロッパで優位をしめている列強、すなわちヨーロッパの運命の決定者が、全世界でも、同様に優位をしめているわけではない。」(142頁)と帝国主義の政治的諸条件の変化を暗示して章を閉じています。この2つの暗示について、みなさんで考えて欲しいと要望しレポーター

トとします。

司会: 4章、5章、6章を一回でまとめるのですから、レポーターの秦さんも苦労されたと思います。4章「資本輸出」が重要且つキーワードであるということとは理解していただいたと思います。皆さんから、質問や補強があれば、お願いします。

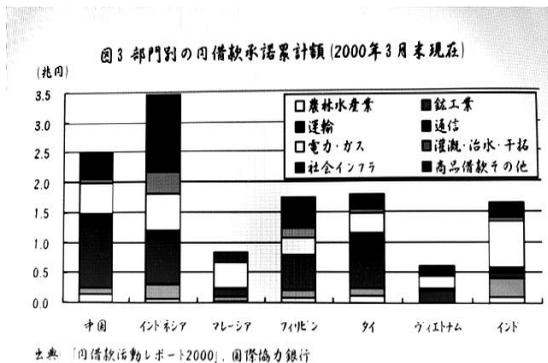
借款の意図を見逃すな

齋藤: 資本輸出の二つの方法については、冒頭で説明がありました。その中の「借款」とは何か? という、国際機関と国家間または、それぞれ異なる国家の政府や公的機関間における長期間にわたる資金の融資のことです。また、政府と関係の深い民間の金融機関や企業が借款の貸し手・借り手となる場合もあります。円借款は、日本政府が発展途上国に対してJICA(国際協力機構)などを通じてODA(政府開発援助)として長期・低金利の資

金貸付を行ってきました。1966年から2006年までに実施された借款の82%がアジア諸国です。アジア諸国は円借款を元手にインフラ(道路、鉄道、港湾、学校、病院など)整備をしました。その中の中国に対する円借款は、1997年から対中関係の悪化と中国経済の発展が原因で、2007年度末で終了しますが、約3兆3000億円実施されています。今年の3月19日に岸田首相がインドに対して今後5年間で約5兆円の官民合わせた円借款を表明(共同通信社配信)したことがニュースになりましたね。「5兆円は国家財政赤字解消に充てるべき」という批判に晒(さら)されましたね。ロシアとインドの関係に楔(くさび)を打ちたいという日本の政治的思惑が見え隠れしますね。

「借款」は、利子をあてこんで資金融資するだけではなく、政治的思惑や「借款の条件として、借款額の一部分を、債権国の生産物、とくに軍需物、

◆みんなの学習講座



出典)ESP2001年7月号 川崎研一(著)

船舶等の購入のことが定められる」という意図が隠れていることを見逃さないことです。

小泉：「資本輸出は広大な植民地を必要とします。」とありますが、当時はイギリスが最も広大な植民地(インドや独立前のアメリカなど)を領有していました。植民地とは何か、植民地政

策とは何か、について説明をお願いします。

欧米と日本の植民地統治に違い

秦：一般的に植民地とは、自国以外の地域へ移住して、新たな領土として隷属させた地域のことです。簡単に言うと、自国民を移住させるために支配下に置いた地域を意味します。植民地支配の目的は、資本輸出を梃子に香料や絹などの特産品や金や石油などの資源を獲得し、自国の経済を豊にすることです。英語では *colony* と表現します。

植民地政策は、目的達成のために債権国(宗主国)が行う政策です。欧米は現地の支配階級を優遇し、その支配階級を通じて統治する間接統治方法を採用しました。日本は、現地人を日本人にする統治政策を採用しました。現地人の文化や習慣などに干渉しました。当時、満州国や朝鮮を外地と呼んでいました。日本の一部として、位置付け

られていた植民地でした。

司会：最後にレポートからの宿題である「恐ろしい爆発の前兆」「帝国主義の政治的諸条件の変化」というレーニンの2つの暗示とは、どういうことでしょうか。

小泉：「恐ろしい爆発の前兆」は帝国主義戦争が起きる前兆ということでしょう。「帝国主義の政治的諸条件の変化」とは、太陽の沈まない国、世界の工場と呼ばれたイギリス帝国は、衰退し20世紀にはアメリカや日本にその席を譲り、21世紀になってからは中国が世界の工場と呼ばれています。それに伴って帝国主義の政治的諸条件も変化したということでしょう。

司会：次回は、第7章「資本主義の特殊の段階としての帝国主義」を三多摩県協の檜崎文雄会長のレポートに学びます。お楽しみに。